

| | |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 氏名 | 影山 亮 |
| 学位の種類 | 博士 (文学) |
| 報告番号 | 甲第 554 号 |
| 学位授与年月日 | 2021 年 3 月 31 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則(昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当 |
| 学位論文題目 | 山手樹一郎を中心とした時代小説ジャンルと同時代メディアの相関関係に関する研究 |
| 審査委員 | (主査) 金子 明雄 (立教大学大学院文学研究科教授) 川崎 賢子 (立教大学大学院文学研究科特任教授) 紅野 謙介 (日本大学文理学部教授) |

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序論

凡例

第一部 山手樹一郎と戦前・戦時下の大衆文学領域

第一章 娯楽と芸術を架橋する〈明朗〉——「桃太郎侍」論

第二章 〈通俗〉への忌避と〈歴史〉への接近——昭和十年代における大衆文学言説

第二部 山手樹一郎と占領下における時代小説ジャンルの再編成

第三章 〈明朗時代小説〉の躍進——B六判雑誌『読物と講談』と「夢介千両みやげ」

第四章 占領下の時代小説ジャンルにおける〈新古交代〉言説

第五章 侍と探偵の蜜月——大衆文学領域のジャンル再編成期における〈捕物帳〉

第三部 〈山手樹一郎氾濫時代〉と戦後メディア

第六章 昭和三十年代における〈剣豪小説ブーム〉と山手樹一郎

第七章 「豊島文人会」に見る江戸川乱歩と山手樹一郎の交流

結論

附録 『新・山手樹一郎著作年譜』(含補遺)

初出一覧

参考文献一覧

(2) 論文の内容要旨

昭和戦前期に大衆文学作家としてデビューした山手樹一郎は、占領期に「明朗時代小説」の代表的作家として文壇的地位を確立し、その後、「桃太郎侍」などメディア横断的に流通した諸作品によって長く人気作家としての地位を維持した。本論文は、山手樹一郎の著作の詳細な書誌的調査に基づき、大衆文学界における山手の位置を同時代の大衆文学メディアの動向との関連性において明らかにすることを通して、時代小説ジャンルの特質とその歴史の変遷を浮かび上がらせることを目的としている。

第一部は山手がデビューを果たし、新進大衆文学作家として認知されつつも、その評価において今一つ伸び悩んだ戦前・戦時下の大衆文学を論じる。この時期の大衆文学界が、国家的アイデンティティの構築・補強に貢献する歴史意識を昂ずる社会の風潮に同調するかたちで、重厚な歴史小説への志向を強める中であって、同時代に広く受容された徳富蘇峰『近世日本国民史』の記述を下書きにして幕末の尊皇攘夷運動(坂下門外の変)に素材をとった作品を試みるなど、大衆文学界の動向に適応しようとして果たせなかった山手の軌跡を追う一方で、後に代表作として評価されることになる「桃太郎侍」を軸にした初期作品の系列で確立される、敵を斬らない「明朗」な時代小説のモチーフと、サイレントからトーキーへという映画転換期において、伊丹万作らが提唱した「明朗時代劇映画」との共時性を指摘し

て、戦時に向かう社会状況の中での大衆文化・芸術の別の可能性の一端を示す。

第二部は戦後・占領期の時代小説メディアの様相と、プレスコードに代表される占領政策によって変容を迫られた時代小説界において、「明朗時代小説」を武器に人気を獲得していく山手の姿が論じられる。占領政策による、いわゆるチャンバラ禁止によって、時代小説界の中心を占めていた剣豪小説の書き手の多くが創作の方向性を見失う状況の中で、山手の「明朗時代小説」が脚光を浴びる様相が、一方で、メディア論的な観点から、この時期の山手の代表作である「夢介千両みやげ」を連載したB6判雑誌『読物と講談』を軸にした、いわゆるカストリ雑誌ブームと週刊誌ブームの間をつなぐ読み物雑誌の動向と接続され、他方で、時代小説界の再編成という観点から、戦前に一定の評価を得ていた「古い人」と戦後に躍進した「新人」たちを作品掲載数・連載期間などの詳細な調査データにおいて比較することを通して、時代小説界における新旧交代（新古交代）の言説と接続され、歴史小説界の再編成が内包した作品の質的変容の実相が指摘される。また、捕物帳という創作ジャンルに着目し、戦時期と占領期に創作環境が逆転したともいえる時代小説作家と探偵小説作家の交錯の様相を分析して、大衆文学界の再編成を捉える新たな視角を示す。

第三部はチャンバラ小説解禁後のメディア横断的な山手ブーム（山手樹一郎氾濫時代）のメディア論的な意味を探る。占領期の終焉後、週刊誌ブームと同調した剣豪小説ブームが到来する中、山手のメディア横断的な受容の広がりや、芸術的文学（純文学）／大衆文学という文学領域内の区分を相対化・無効化する力として作用する様相を記述する。

附録として、本論文の記述のベースとなっている、八木昇「山手樹一郎年譜」（『大衆文学大系』第27巻）を大幅に増補・改訂した「新・山手樹一郎著作年譜」を付している。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

（1）論文の特徴

本論文の特徴は、第一に、附録として論文末に付された「新・山手樹一郎著作年譜」に象徴されるように、従来、学問的なレベルで十分な検証がなされてきたとは言い難い、作家としての山手樹一郎の活動について、徹底的に実証的な観点から洗い直そうとした研究姿勢・研究手法に認めることができる。第二に、実証的な姿勢・手法で蓄積された情報に基づいて、山手の創作活動の総体を、同時代の大衆文学ジャンル、時代小説ジャンルの動向を文脈にして読み解こうとした点が指摘できる。そして第三に、大衆文学ジャンル、時代小説ジャンルの動向を、同時代の社会・歴史的背景を考慮しつつ、広くメディア環境全体、大衆文化全体の動きの中で把握しようと努めた点が本論文の特徴となっている。

（2）論文の評価

本論文の評価は以下の要点にまとめることができる。

第一に、本論文の論述のベースとなっている山手の創作活動全般にわたる詳細な書誌的

調査は、論文末に「新・山手樹一郎著作年譜」としてまとめられているが、それは八木昇による「山手樹一郎年譜」の増補・改訂の域にとどまらない圧倒的な情報の集積となっており、今後、山手樹一郎研究ばかりでなく、大衆文学、時代小説研究の基礎的情報として長く参照される達成と認めることができる。

第二に、そのような情報に基づいた山手樹一郎の創作活動の通時的な把握が、大衆文学ジャンル、時代小説ジャンルの消長と密接にかかわった雑誌メディアの特徴やその動向を通時的に把握する視角と結びつけられることによって、時代ごとの人気作品を網羅することの多かった従来の大衆文学史記述に、メディア史論・メディア論的観点を導入する可能性を示した点が、今後の大衆文学、大衆文化研究の方向性を示唆する貢献として高く評価できる。

それと関連して、第三に、メディア史論・メディア論的観点から記述された時代小説界の様相と、歴史・社会・思想状況との交錯の様相を考察する可能性が、例えば戦前期の時代小説と映画の共時性を論じた第一章、占領期における暴力表象の問題と関わる第三章などで示されており、本論文における達成としては限定的と言わざるを得ないものの、大衆文学、大衆文化研究の方法論的可能性や新たな問題意識を示す成果として評価できる。

研究上の手続き、論文作成の作法も必要な水準を充たしており、学位に相当する優れた研究成果と認めるものである。